

## 朔太郎——その一側面

——「浄罪詩篇」をめぐって——

佐藤 泰 正

ジョン化した「魂の抒情詩」を書いた」（那珂）ものであると評することも、また過言ではあるまい。

周知の如く朔太郎の詩作中、「月に吠える」の冒頭に収められた「竹とその哀傷」の章十一篇の作られた時期——即ち大正三年秋から四年の春頃にかけて「浄罪詩篇」とよばれる、およそ二十余篇の、一連の詩篇がある。たとえば「竹とその哀傷」中、「卵」「笛」「天上縊死」「すえたる菊」「冬」「竹（I）」の詩篇は、いずれも雑誌発表時に「浄罪詩篇」と付記されているが、しかし、その付記の如何を問わず、この一時期の詩篇のすべてが、同じ発想、志向の下に記されていることは疑いない。しかもこの時期はまた「月に吠える」の本質が形成された時期（那珂太郎）であり、この「大正三年末から大正四年はじめにかけての、「竹」のヴィジョンを核とした一時期の制作」こそは、「その詩語の面から」も「障目」すべき転換を示すものであることは、那珂氏のみならず、多くの詩家の指摘する処でもある。しかもこれはまた、単に技法上の変革に止まらず、「おそらく日本ではじめて実存の深部をヴィ

ジョン化した「魂の抒情詩」を書いた」（那珂）ものであると評することも、また過言ではあるまい。

しかし、ここに敢て彼みずから註した「浄罪」とは何か。その宗教性とは何か。たとえば草野心平氏はその座談中（「無限」一二号、昭三七・一一）に、朔太郎が「その短い期間に猛烈にそこ（キリスト教）に入っていったこと、そのゆえにこの時期の作中に出てくる「意識」の「非常に強烈」であったことを挙げ、三好達治氏もまたこれに肯き、キリスト教に「非常に深く入っていると思う」と言い、その多くの草稿詩篇に「苦闘」の刻印を見るところ。また「罪の意識というものは本物だったわけですね」という吉田精一氏の言葉に「そう思います」と強く断じている。この「浄罪詩篇」期に、キリスト教思想、あるいは「キリスト教的意味の原罪意識」とのかかわりを見ようとせぬ伊藤信吉氏もまた、ここに独自の「思想詩人としての原質」あるいは「思想の根」ともいふべきものを見るという。

これらの言葉にも、この一時期が、朔太郎詩の形成の原質にかか

わる——深い課題を蔵するものであることは窺われよう。しかし、にも拘らず、なお彼にあつて、その「宗教性」の意味は、なかなんづ「浄罪」の意味は、充分に解き明かされているとは言えない。果してそれが「朔太郎の精神史の一過程」であつたとしても、その「 $\times$ 罪 $\times$ や $\times$ 懺悔 $\times$ の意識の触発は、その詩的人格を形成するための一つのモメントにはかならぬ」と、また、彼は「絶対の信仰でなく」「 $\times$ 浄罪 $\times$ を $\times$ 思考 $\times$ 」し、「 $\times$ 信仰 $\times$ を $\times$ 思考 $\times$ 」（伊藤信吉）したにすぎぬと、断じうるであらうか。あるいはまた、それらが単に「宗教的ムウドを基調とする」ものでなく、まさに朔太郎の「血肉的に本質的なものが、そこに集約的に噴出した」ものであることもまた明らかであるが、しかし同時に、「そこにある多少の宗教性は、むしろ表現の道具だての範囲に属すると見るべきもの」と言ひ、「この時期の特色は、宗教性をも含めた、広い意味の思想性にあるのではない。そういう言わば上層意識的なものではなく、彼のもっとも深層から、そのぎりぎりに近いところのものが表出された時期である」（竹越三男）という時、その深い洞察にもかかわらず、ここでもまた「宗教性」なるものへの、ある深い固定観念が、評者の眼を塞いでいると言ひうるのではあるまいか。その「もっとも深層から、そのぎりぎりに近いところから」のものであり、「いわゆる信仰のムウドとは縁遠い」——まさにそのところに、実はまぎれもなく深い、真の「宗教性」が滲出し、呈示されているのではないか。「浄罪」の一語も、その詩篇中に屢々繰返される $\wedge$ 懺悔 $\vee$  $\wedge$ 祈り $\vee$  $\wedge$ つみ $\vee$  $\wedge$ 罪びと $\vee$ などの詩語も、単なる「表現の道具だて」ならぬ——その「もっとも深層から」の、「そのぎりぎりに近いと

ころから」の表白として読みとりうるのではないか。恐らくこの小文は、諸家のすぐれた論に多くを負いつつ、なおこの「宗教性」、さらには「浄罪」の一語をめぐる、ひとつの問いを投げつつけることとならう。

## 二

ますぐなるもの地面に生え  
するどき青きもの地面に生え  
凍れる冬をつらぬきて

そのみどり葉光る朝の空路に

なみだたれ

なみだをたれ

いまはや懺悔をはれる肩の上より

けぶれる竹の根はひろがり

するどきもの地面に生え

言うまでもなく、この「竹」(Ⅰ)は、「竹」(Ⅱ)と共に「竹とその哀傷」の中心をなす詩篇であり、その草稿五篇が遺されている。いま竹越三男氏の「『浄罪詩篇』論」(第二次「詩世紀」一号—七号)によれば——「浄罪詩篇」に関する資料的に精密な検証を踏まえた、最もすぐれた論攷のひとつであるが——その第一の草稿は次の通りである。

$\wedge$ (凍れる冬を)／蒼天磨きをかけ／ますぐなるもの地に立ち／する

どきもの地に立ち／そのみどりは青き今日の空ちに／なんだたれ  
／なんだたれ／いのりあげ／いのりあげ／懺悔をはりて一念の／  
いのれる人の肩の上より／(きたる幹は)／みよ青竹の根は生え  
／青竹の幹光る▽

この第一より第五までの草稿の推敲、転移のあとを精細に辿ったものにもた、佐竹節夫氏の考察(「『月に吠える』所収の一詩稿について——『竹』▽(仮題)推敲の一考察」——『国文学研究』第二十集)があるが、その推敲のあとと著しい草稿第一の原型的なものを、氏は次のように読みとっている。

△すぐなるものを地に／するどきものを地に／竹のいつしん／そのみどりは青き今日の空ちに／いのりあげ／いのりあげ／怒れるひとの額のうちへより／青竹光る▽

この簡勁な骨格は——しかし「朔太郎独自の甘味やセンチメンタリズム」によって、定稿にみる如き表現にまで変化してゆく。氏は第二稿以下定稿までの転移をくわしく辿りつつ、そこにみる「文学的情操」と「キリスト教的情操」との葛藤を読みとり、その根底に深い宗教的情操を蔵しつつ、結局は「病的な(宗教的情操の逆の現れ) 情懸性(文学的情操の滲透)」の表現に終っていることに注目している。この指摘は極めて興味深いものであるが、しかし「病的な情懸性」をもってそのまま、反宗教的な文学的情操の滲出とのみ断ずることはできない。ただ、佐竹氏の指摘の重要さはむしろ、こ

の「月に吠える」の本質をなし、この時期の製作の「核」ともいえるべき「竹のヴェイジョン」が、その本體に於て、△竹のいつしん▽と言ひ、△いのりあげ▽△いのりあげ▽という如く作者自身の真率なる祈念に、その深い脈動にすらぬかれてゐることを、呈示した点にある。(この点に於て氏の指摘は竹越氏以上に、この詩の内包する骨格を、あざやかに浮彫りしているかにみえる。)

この詩篇の定稿に至る詩語の転移を辿れば、たとえば△怒れるひとの額のうちへより▽の一句は——△いのれる人の肩のうちへより▽となり、さらに第二稿以下——△懺悔を終れる肩の上より▽と転じ、さらに△いまはや懺悔をはれる肩の上より▽の定稿となり、また一方、△青竹光る▽の一句は——△みよ青竹の根は生え▽と転じ、△げぶれる竹の根はひろがり▽のイメージにまで展開する。これがそのまま「竹」(Ⅱ)の——△地下には竹の根が生え▽以下の、かすかにけぶり、ふるえる纖毛のイメージにまでつながることは言うまでもなく、さらには後の「地面の底の病気の顔」にみる、△地面の底のくらやみに▽あらわれる△さみしい病人の顔▽とからみあう竹の根の△げぶれるごと▽きイメージにまで展開している。

ここに明らかなのは、△竹▽のイメージが地上と地下とに二分され、倫理的、上昇的な地上のイメージと、より感覺的、病患的な下降的な地下のイメージとが鋭く対比されることである。「地面の底の病気の顔」と同時に「地上巡礼」(大正四年三月号)に発表された「巢」(「蝶を夢む」所収)をみれば、竹の根の△げぶりのやうに▽ほそいイメージとからんで、△ああ髪のもみだれみだれし／暗い土壌に罪びとは／懺悔の巢をぞかけそめし▽の一句をもって終

わっている。さらに竹越氏の指摘する草稿によれば、△暗い土壌▽  
ははじめ△さむき牢獄のすみ▽あるいは△ひとやのすみ▽の語をも  
つて表わされていることが注目される。この地下と地上の二分のイ  
メージの意味するものを、最もあざやかに示すものは「竹とその哀  
傷」中の一篇「冬」であろう。

△つみとがのしるし天にあらはれ、／ふりつむ雪のうへにあらは  
れ、／木木の梢にかがやきいで、／ま冬をこえて光るがに、／お  
かせる罪のしるしよに現はれぬ。／みやや眠れる、／くらき土  
壤にいきものは、／懺悔の家をぞ建てそめし。▽

もはや明らかなごとく、「浄罪詩篇」の主旨をなすものは——  
△つみとがのしるし天にあらはれ▽△おかせ罪のしるしよに現  
はれぬ▽の一句につきるものであり、さらにまた、その明らけき地  
上の下に、うごめきつ、懺悔の祈りを念ずる地下の△ひとや▽  
の△罪びと▽の姿にあると云って誤りあるまい。このイメージは  
「竹とその哀傷」末尾の一篇「卵」にあつては、冒頭の「地面の底  
の病気の顔」とあい照応し、またこの十一の詩篇の指し示すところ  
を集約するかのごとき、最も簡浄なる形容をもつて次の如く記され  
る。

△いと高き梢にありて、／ちいさなる卵ら光り、／あふげば小鳥  
の巢は光り、／いまはや罪びとの祈るときなる。▽

以上に述べた「浄罪詩篇」のモチーフを示すものとしては、さら  
に「竹とその哀傷」中、「竹」(Ⅱ)の次に置かれ、ただひとつ無  
題の、しかも小活字で記された「みよすべての罪は」の一篇があ  
る。

△みよすべての罪はしるされたり／されどすべては我にあらざり  
き、／まことにわれに現はれしは、かげなき青き炎の幽霊のみ、  
／あかかする日のせつなる懺悔をも何かせむ、／すべては青きほ  
のほの幻影のみ。▽

これは、竹越氏の指摘によれば「浄罪詩篇ノオト」中「浄罪詩篇  
奥付」と付記された二篇中のひとつであり、その原型「青き炎」  
は、前記詩篇とほぼ同じものであり、若干の諸句の異同があるが、  
特にその改変の著しい最初の二行のみあげれば、原型は次の通り  
である。

△合掌せる肩の上にはあらはれ／鬼はすべてを示せり／みよすべて  
は示されたりしが／すべては我にあらざりき▽

この一篇の示すところもまた、あの△つみとがのしるし天にあら  
はれ▽(冬)の詩句につながるものであり、しかも△すべては我に  
あら▽ず、△あかかする日のせつなる懺悔をも何かせむ▽の嘆きが深く  
吐露される。(ここで原型中の△○あかかする切なる懺悔をも何か  
せむ▽にみる如く、この一行冒頭に○印が特に付されていることが

注目される。

この八せつなる懺悔Vさえをも虚しきものと嘆せしめる——その底にあるものは何か。この詩篇を解く鍵は、同様八奥付Vと付記された「偉大なる懷疑」と題する、いまひとつの詩篇にあると言えよう。

八主よ／あきらかに犯せるつみをば／あきらかに犯せるつみと知らしめ給へ／異教の偶像に供養せることをばあかしせん／みちならぬ姦淫のつみをばあかしせん／しかはあれども／我は主を信ず／我は主を信ず／まことに主ひとり信ず／かかる日の懺悔をさへ／われが疾患より出づるものとしあらば／すべて主のみこころにまかせ給ひてよ／しかはあれども／われは主を信ず／主よ／あきらかに犯せるつみをば／あきらかに犯せるつみと知らしめたまへV（傍点筆者）

ここで注目されることは、竹越氏の言われる如く、「八疾患Vを八懷疑Vとし、しかもこれに八偉大なるVと冠している」ことではなく、逆に、八かかる日のV切なる八懺悔をさへV、それがみずから八疾患より出づるものVならば、八すべて主のみこころにまかせ給ひてよVと念ずる——そのくだかれた魂の真率なる表白にあると、みるべきであろう。

八おかせる罪のしるしよにも現はれぬVの主調音は、ここでは八あきらかに犯せるつみをばV八つみと知らしめ給へVという折念として告白される。もはやこの二つの詩篇が同体のものであり、ま

さしく「浄罪詩篇」をつらぬく主想の八奥付Vたるべき告白をも含むものであることは明らかであろう。（「みよすべての罪は」が無題にして、特に小活字でくまれていることに「八奥付」という氣勢）があらわされているという竹越氏の説は、まさしくその通りであろう。）

われわれはここで、あの地下の病める相貌の孕む、せつなる懺悔が、折りが——しかし、みずからの疾患より出づるものならば、この懺悔とは、懺悔の詩篇とは何か——と問う、この真率なる問いがまさしく、この「浄罪詩篇」の八奥付Vとして、すなわちみずからの詩に向かつて最後に置かれた問いとして、示されていることを見逃してはなるまい。ここに至って、詩人の言う八疾患Vとは何かが問われ、また敢て八かかる日の懺悔Vとよぶ——その背後に横たわるひとつの事件をめぐる様相が、取り上げられねばなるまい。

### 三

「まるで冬になりました。利根川の光る岸辺で魚がはねる。くらやみの夜路で蝕えた菊が光る。病気が烈しくなる。／汝自身に於て汝の肉身を惨毒せしむるものを汝に於ては明らかに天意を怖る。／われは疾患し瓦期を吸入しわれは合掌し懺悔しわれはわれ自身を貫ぬきいたましむるために日に十数本の銀針を用ゆ。しかれども疾患は依然たり。あかくて我は酸腐しかくて没沈するか。あわれ危うし危うし。」

白秋にあてた朔太郎書簡（大正三・一一・二七）のひとつであるが、白秋宛の書簡を一巻にあつめた「若き日の欲情」（木俣修編）

昭和二四・四、角川書店刊)を通読するならば、ひとはその孤独と苦悩の故の異常なまでの白秋への傾倒を感じることに共に、あの「浄罪詩篇」期の背後に、病的な感覚の錯乱と不安——彼自身語る如く、その心身を滅するていの深い危機のあったことを疑うことはできない。

冒頭に掲げた書簡の示す如く、自らの「疾患」と「天意を怖る」——罪の自覚とは、あい重なつてこの書簡集をつらぬき、その期間が、この集冒頭の大正三年七月より翌四年六月頃までに至っていることを知る。この時期は、先にふれた「浄罪詩篇」の制作期——「大正三年秋あたりから翌四年春ころまで」と符合する。

「私は絶大なる恐怖と驚愕と羞恥と困惑との間に板ばさみとなつて煩悶して居ります。私は恐るべき犯罪(心靈上の)を行なつたために天帝から刑罪されて居るのです。時が私の苦悶を薄らげるのをまつより外に逃るゝ路はない。しかし此の苦悶は人に語ることも出来ない。」(大正三・一一・二五)

この「天帝」よりの「刑罪」の痛覚が、その書簡中に「エレナ」とよぶ人妻と関連のあることは、すでに評家の指摘するところである。

「ゆうべあれから大へんなことをしてしまひました。また未練にもエレナに逢ひに行つたのが失敗のもとです。今朝あたりはエレナの家で大騒ぎをして居るにちがいない。悪くすると私はもう郷里に居ることができなくなるかも知れない。ああもう考へると苦しくなる。死にたい。ピストルで一発ずつんとやりたい。私はエレナのハズに本名を知らした。長い間秘密にして居た二人の交歓もこれでお

しまいだ。酔つばらつたとは言いながら何といふ馬鹿なことをしたものだ。死にたい、死にたい」(大正三・一一・八)。

このなまなましい錯乱と衝動の語るものは明らかであろう。彼の告白が、白秋の「ソフィー」と呼んでいた人妻との事件」に重ねられ、この事件による衝撃とその罪の負い目が、「浄罪詩篇」制作の起因となつたと目する評家(河村政敏)の言もまた肯げるところである。しかも、「一旦浄罪が始められれば、それは逃れられない刑罪として実感され、自虐的神経に作用されていよいよ深められ、ついに人間の原罪の思念にまで進んでゆく——こうしてついに、△見よ、合掌せる懺悔者の背後には美麗なる極光がある▽という、「きらめく極光の中に吊された懺悔者の凄惨なイメージを生む」(河村政敏)に至る——その道筋もまた見やすいところである。

しかし、このような極限のイメージにまで至る朔太郎の「浄罪」が、自身の「恐怖」「悪感」「痛み」に耐えつつ「自虐的に神経の光をみつめ」、その「神経的、生理的幻覚の創造」をより根源的に深め、掘り起こしてゆく媒介であつたとき、その「浄罪」に対する評価は、やはり一面に終わるのではあるまいか。むしろ逆に、その「神経的・生理的幻覚の創造」を根柢においては病者の歪みとして、罪として問い、告発せざるをえなかつたところにこそ、彼が言う「浄罪」の真義があつたのではないか。

冒頭に掲げた書簡を引くまでもなく、「われは疾患し」「疾患は依然たり」とは、書簡の随所にみるところである。自分のように「疾患の苦痛から悲鳴をあげる」者もいるが、要はその人の全存在本能が傾注された場合に始めて、「概念者流」ならぬ「光ある芸

術ができる」(大正四・四・二七)とは、彼の詩觀の本體をなすものでもあった。

「私は健康を愛する／けれども疾患を愛する／疾患においてその実體を變質されたとするの物象は、より多くの靈性とより多くの光輝性とに於て全く新しい有機體を化成する」

「私が疾患スルトキ／スベテ見エザルモノガ見エ／タトエバ竹ノ根ニハムラガル見エザル毛ガ煙ノゴトク生エテ見エ……」

「私ノ仏ハ疾患仏、昆虫ノヤウナ青イ血肉ト黄金ノヤウナセキズイ心棒ヲモチ給フ、ソノセキズイたるや真に怖るべし」

以上の如き「淨罪ノート」中の言葉を引き、「幻視者としての朔太郎を考へる場合に」彼を「病的神経の所有者と視定」することの誤りを指摘し、その「疾患」がまさしく「詩人の方法につながつて」(竹越三男)いることを評者は説く。確かにその「疾患」が詩の「方法」につながり、創作の極限的深化への發条とさえなっていることは疑いない。しかし、にもかかわらず、「淨罪」と「疾患」とを單に詩人をして自虐と原罪の思念へと深く投身せしめてゆく契機として、無媒介に融合せしめることは誤りであろう。

すでに先にもふれた「淨罪詩篇奥付」と付記された未定稿詩中の一の示す如く——  
／かかる日の懺悔をさへ、われが疾患より出づるものとしあらば、すべて主のみこころにまかせ給ひてよ  
／ここにわれわれは、みずからの詩を「疾患の苦痛」より生まれるものとし、「疾患」によつて「すべて見えざるもの」をも見うる「見者」たると自負し、「疾患」を自らの「詩の方法」と化した詩人が、また同時に、みずからの「疾患」をその歪みと罪のゆえに、

これを淨め、ただし給へと祈らざるをえぬ——この一箇の碎かれた魂の眞率なる告白につらぬかれていることをも、見逃してはなるまい。

ここではもはや「淨罪」の意識は、「疾患」を否定媒介的につつまとるものとして登場する。それは自らの罪を根源的に問うものであるが故に、最後の登場者として、敢えて「淨罪詩篇奥付」とよばれる。先にもふれた如く、「竹とその哀傷」中に収められた無題詩——  
いまひとつの「奥付」と付記された、あの詩篇の一節に——  
／ああかかる日のせつなる懺悔をも何かせむ  
／の一句の記されていることの意味も、この「淨罪」の眞義にふれずしては解くことができない。

ここにはまぎれもなく靈と肉との、祈りと詩との、一元的な把握がある。これをよりポジティヴに表現すれば——「私はいまキリストを求めている。それによつて私が救はれるか、救はれないか、問題はここにある。もし永久に私が信仰を發見しなかつたら、私は永久に『苦しき懺悔者』又は『素人詩人』として終るにちがいない」(前掲佐竹氏論文中の引用による)という創作ノート中の一句となろう。キリストによつて救われなければ、自分は「素人詩人」として終るにちがいない」という時、まさしく信仰と詩とは一元として捉えられている。(ここでわれわれは「月に吠える」一巻が周知の如く、無教会のキリスト者であり、自分の最もよき理解者として兄事していた従兄萩原栄次に捧げられていること、同郷の詩人高橋元吉宛の書簡にみるキリスト教への深い関心、また妹幸子と前橋バプテスト教会に出席したこともあることなど、彼のキリスト教への

関心がかりそのものでなかつたことを指摘することもできる。もちろんこれらの事実を無媒介に、また必要以上に過大視することも危険であろう。さて、上來「浄罪」の一語をめぐって、その「宗教性」の意義をいささか探ってみたが、恐らく朔太郎氏の「原質」なるものは、またその「宗教性」をめぐる彼の本體なるものは、たとえば、この「浄罪詩篇」期の彼に、最も影響を与えたと目される白秋詩との対比をめぐって、より明らかとなるであろう。

#### 四

朔太郎にあつて、その浄罪詩篇の直接の契機が、エレナとよぶ人妻との事件による衝撃と罪の意識に発するものであり、またこの間における孤独と苦悩のゆえの異常なまでの白秋への傾倒については、白秋宛の書簡において、すでに見て来た。

「わずかの時日の間にあなたはすつかり私をとりこにされてしまつた。どれだけ私があるために薰育され感慨されたということをおあなたには御推察が出来ますか。朝から晩まであなたからはなれることが出来なかつた私を御考え下さい」(大正三・一〇・二四)。

「真珠抄は聖書を始め読んだときと同じ気分でした、この上申しあげることは出来ません」(大正三・九・四)。

「ひさしぶりのおはがきになみださんらんいちれつりうていありがたしともありがたし」(大正三・一一・一六)。

これら白秋の詩調をそのままの文辭に至るまで、彼の異常なまでの心酔ぶりは、逐一引用するまでもあるまい。その不義の露頭に

あたつては、なまなましい錯乱と衝動を臆面もなく打ちあげ、またある時は、この自身のまぬがれがたい苦悩を救つてくれるものは「あなたより外にない」と訴える——そこには白秋の「ソフィーと呼んでいた人妻との事件」が重ねあわされていたことは、すでに見た。

周知の如く明治四十五年、白秋二十八歳の時、人妻松下俊子との恋愛事件により告訴され、二週間市ヶ谷未決監に拘留、後無罪免許となつたが、社会のはげしい非難と糺弾を受け、翌大正二年四月夫と離別した俊子と再会、結婚。五月、新生を期して三浦三崎に転住。翌三年妻俊子の病氣療養のため小笠原父島に渡つた。この年七月帰京、俊子と離別するに至るが、この間の体験から生まれたものが「真珠抄」「白金ノ独楽」「畑の祭」などの詩、また「雲母集」「輪廻三鈔」などの短歌であるが、特に白秋の詩業中、異風の作とされる「真珠抄」(大正三・九)、「白金ノ独楽」(大正三・一一)は、当時新たに注目、喧伝された「梁塵秘抄」の影響によるものであり、ここに新生を希う「光明礼讃の法悦の心境」(山本健吉)が唱われていることは周知の通りである。

朔太郎が「真珠抄」を聖書と「同じ気分でした」と言い、あるいは白秋の作「掌」(「白金ノ独楽」所収)を評しては、「天下第一品、専売特許。高僧の説教を深山の奥で大きくやうな気持です」(大正三・一一・五)という時、これらの言葉の間に、「曾てあなたの芸術が私にどれだけの涙を流させたか、その涙は今あなたの美しい肉身にそそがれる。真に随喜の法雨だ」(大正三・一〇・二四)云々という如き言葉を置いてみるならば、当時の白秋という存在と



その詩業が、どのようなものとして受けとめられていたかは瞭然たるものがある。先の白秋の二集は、まさしく彼の前に「懺悔、汚辱をそそぎ去ろうとする発心が生んだ人間、唱名」(木俣修)として、みずから同じ苦悩の先達にして、その苦しみからの離脱を先取するが如きものとして、あった。「真珠抄」を聖書と同じ気分で見るといふ時、それは単なる作品以上の何もものであったはずだ。この時期の朔太郎の拾遺詩篇の多くに白秋の影響を見、また特に次の如き詩篇が、白秋の「直訳でしかない」(河村政敏)とさえ断ぜられることも当然であろう。

△ひとのいのりはみなみをむき、／むぎはいつしん、／われはしんじつ、／そらにうかびて、ゆびとゆびと哀しみつれ、たましひは／ねもごろにほとけをしたふ。▽(永日和讃、大正三・一一)

しかし、これら△いつしん▽△しんじつ▽などの詩語の類縁、あるいは△ひとのいのりはみなみをむき▽△たましひは／ねもごろにほとけをしたふ▽などにみる向日性、あるいは仏教的法悦境への志向にもかかわらず、むしろ白秋の影響ありと目される、この期の拾遺詩篇中の「供養」(大正三・七)、「純銀の賽」(大正三・一〇)、「感傷の塔」(大正三・一〇)、「蒼天」(大正三・一一)、「月蝕皆既」(同)、さらに「秘仏」(同)、「游泳」(同)、「磨かれたる金属の手」(同)、「孝子実伝」(大正四・一)、「疾患光路」(同)、「聖餐余録」(同)、「肉身」(四年はじめ頃と推定される)など、その多く——あえて言えばほとんどすべては、明らかに「うららかに

宗」ともよばれる光明讃仰の白秋世界とは、全く異質の世界を示現するかにみえる。たとえば次の如きもの——

△手に釘うて／足に釘うて／十字にはりつけ／歯がみをなして我こたふ。△空もいんいん／地もいんいん／肢体に青き血ながれ／するどくしたたり／電光したたり／身肉ちぎれやぶれんとす／いま裸形を恥ぢよ／十字架のうへ／歯がみをなして われいのる▽ (情慾)

この、情欲のゆえの罪の負い目と痛みをにないつつ、ついには△身肉ちぎれやぶれんとす▽という——この肉の破れのイメージは、△われの肉をやぶり▽(磨かれたる金属の手)、△にくしんの血をしたたらすの路▽(疾患光路)、△ああ塔を立つるの額は血みどろ／肉やぶれ、いたみふんすれども▽(晶玉の塔)、△われはわれの肉身の裂かれ鋼釘となる薄暮をおそる▽(狼)、△肉やぶれ谷間をはしる▽(偏狂)——の如く繰り返し唱われ、朔太郎世界の本體につらなるかにみえるが、その極まるころはおのずからに、ふたつの世界を示すかにみえる。先ずそのひとつは、次の如き短唱にみられよう。

△つゆしものうれひはきえず／わづかなるつちをふむとて／あなうらをやぶらせたまふ▽(秘仏)。

これは破れやすき△疾患、△としての詩人のイメージをも現わすかにみえるが、もとよりそればかりではあるまい。△あなうらをや

ぶらせたまふVの一句には、彼がその作中に幾たびかふれた入雪のうへをふみV(行路)、あるいは入ふりつむ雪のうへをけりゆくV(われの犯せる罪)——あの入いえずの素足Vの入やはらかVさが、その肉感が、重ね合わされているといつてよい。さらに言えば、人間の破れを自らの破れと痛みの中につつまとらんとする——あの十字架の痛みへの念いがかすかにもひびいていたと、言えなくはなかるう。

もとより「朔太郎における超越的存在が、しばしばキリスト教の説く神と東洋的な悟脱者たる仏陀の觀念とを混在させていたことは、『遍路道心』(草稿)の『きのふにかはるわれの身のうへゆびはゆびとて十字を切りし/手にも香華はおもたくしをれ/いちねん供養の山路をたどるVなどに照らしても明らかである』(河村)しかし、この矛盾はなにもでもあるまい。肝心なことは、この淨罪詩篇期に彼が唱ったものが「罪を犯した人間が人間以上のものに訴えかけるある種の宗教的感情の緊張であつた」(河村)と評家をして言わしめるもの——その祈りの対象として、自らの破れをつつむ——愛(あるいは慈悲)のやぶれやすき入肉身Vの存在が、念じられていたことであろう。

恐らくこれらは、白秋が「白金ノ独楽」に唱った次の如き世界——

△感涙ナガレ、身ハ仏、ノ独楽ハ廻レリ、指先ニ。ノカガヤク指ハ天ヲ指シ、ノ極マル独楽ハ目ニ見エズ。ノ円転、無念無想界、ノ白金ノ独楽音モ澄ミワタル。V(白金ノ独楽)  
△光リカガヤク掌ニノ金ノ仏ゾオハスナレ。ノ光リカガヤク掌ニ

朔太郎—その一側面

ノハット思ヘバ仏ナシ。ノ光リカガヤク掌ヲノウチカヘシテゾ日モスガラ。V(掌)  
△眼ミヒラキツクツクトノ真実ハジメテ見アゲマツル。ノ山マタ山ノ天景ニノ光リカガヤクモノコソアレ。ノ帰命頂礼、ヨク見レバノ麗カナル、燦燦ト、ノ聖十字架ニノカカリタマフハ白金豆ノゴトキ耶穌V(開眼)

これらの世界とは、ついに無縁のものであつたはずだ。ここにはみずからを包む光耀遍満の裡に——入仏Vも入耶穌Vも入白金豆ノ如キV掌上の珠と化する——自我遍満の、あるいは即身成仏的な法悦境が、かるやかに唱いあげられているにすぎない。これら入白金昇天V入白金淨土Vの光明世界が、朔太郎にあって、ついに無縁のものであつたことは、さらに次の如き詩篇にも明らかにかがえるであろう。

△にくしん/にくしん/たれか肉身をおとろへしむ/すでにうぐひす落ちてやぶれ/石やぶれ/地はすれどく白金なるに/にくしん/にくしん/にくしん/にくしんは蒼天にいちらしき涙を流す  
△ああなんぢの肉身V。(肉身、傍点筆者)

ここには入するどく白金なるV地上世界のただ中に、ついに昇華し、帰一しえざる入肉身Vの入やぶれVが、疎外の痛みが、あざやかに読みとられる。これはまたそのまま次の如き詩篇の一節にも、つながってゆく。

△……／さびしや、空はひねもす、白金／はやわが手かたく合掌し／  
瞳はめしひ／脳づゐは山路をくだる。／ああ、金性の肉のおとろへ、  
／みやま滝ながれ／青らみいよいよおとろふ／いのれば銀の血と  
なり、肉やぶれ谷間をはしる▽（偏狂、傍点筆者）

これらの詩にあつては、△地▽の、あるいは△天▽の、その△白  
金▽世界のただ中に疎外された人間の孤独と痛みが、肉のやぶれと  
して示される。すでに明らかであらう——この多くの作中にみる  
△肉のやぶれ▽のイメージの極まるころ——そのひとつは、先に  
もふれた如く自身の破れをつつみとらんとする超越者の破れや痛み  
のイメージとあい重なり、またいまひとつは、白秋世界にみる如き  
白金浄土、光明讃詠の世界に、ついに帰一しえざる脱落者の、孤独  
の痛みとして示現される。このふたつがその△肉身▽にあつて、あ  
たかも盾の両面の如く互いにくい入り、あい重なる処に、あの浄罪  
詩篇期の数々の詩篇は滴り落ちた。

さらに、この作中（偏狂）にみる△青らみいよいよおとろふ▽  
の一句もまた、朔太郎独自の表現として注目される。△青らみ▽と  
は屢々使われる詩語であり——

△兄の恋魚は青らみゆきて／日毎にいたみしたたり／いきもたえ  
だえ▽（幼き妹に）△魚の性はせんちめんたる／みよ、うみはみど  
りをたたへ／肉青らみ／いんいんとして二人あひ抱く▽（月蝕皆  
既）

さらには次の如き作にも——

△いっしんなれば／あほむけに屍体ともなる。／つめたたく合掌  
し、／いんよくいちねん、／きりぎりす青らみ、もはら、／雀み  
そらに殺さる。▽（蒼天）

この一篇は、その詩法において明らかに白秋影響下の作とみられ  
るが、しかしこれらにみる肉の△青らみ▽とは、あの白金耀光の世  
界とは異なり、情欲のゆえに肉の負い目をひきずる、生の痛みを表  
白にほかなるまい。いまこの「蒼天」と白秋の次の作を比べみるな  
らば、その違いはさらに明らかであらう。

△一心コソハウレシケレ、／光リツメタルコホロギハ／翹鳴ラ  
シ、／肢ヲサスリ、／流石フルヘテ敬礼シ、／遂ニ雌ヲバ押ヘタ  
リ。▽（昆虫成仏三曲——、コホロギ）

△草葉ニツルメルキリギリス、／絶エテ音コソセザリケレ。／耀  
キ耀クキリギリス、／白金浄土ノキリギリス。▽（同一二、キリ  
ギリス）

一心交歓のゆえに——そのまま△白金浄土▽のそれと化する白秋  
世界に比して、朔太郎の作が罪の翳りを滲ませつつ、なお敢えて  
「蒼天」と題されていることは意味深い。この浄罪詩篇の多くの作  
が、あの△つみとがのしるし天にあらはれ、……おかせる罪のし  
るしよにも現はれぬ。▽（冬）という罪の顕在の意識を含んでいる

ことは、ここにもまた明らかにみられよう。△天▽とは彼にあって、まさしくその下にあって、肉の負い目がさらされざるをえぬ——何ものかのあかしであつたはずだ。

さて「浄罪詩篇」制作の一時期をめぐって、その思想的、あるいは宗教的「原質」なるものについて、いささかの究明を試みて来たが、それらがたとえは「その発生の当初から一つの運動体であつて、その中心部は己れの位置を次第に空無化しつつ周囲に運動を捲き起していった颯風の眼の如き役割を本来としたところの何ものか」であり、やがてそれを脱することによって詩人は「祈祷と懺悔を忘れた思索者として彼自身を一層しつかりとり戻し」、よりのびやかに、自由に歩みはじめたとは、三好達治氏の論ずる処であるが、しかし、この一時期にみる「原質」なるものが、彼の生涯にあってどのような姿容を示し、またどのような役割を果たしたかは、朔太郎のみならず、この国の近代詩の本質にかかわる一課題である。これらはまた別稿を期すべき課題であるが、今はただ、「生涯再びそれは如何なる形でも程度でもつひに回帰を見なかつた」（三好）運動体にすぎぬとは断じえまいとのみ、指摘するにとどめておこう。